

## 【資料】

# 自己の「非ユークリッド的」理論

水 島 恵 一

## “Non-Euclidean” Theory of Self

Keiichi Mizushima

We have clarified in the previous reports the fact that various experiences including peak-experience, religious experience, and other growth-experiences, as well as pathological experiences (double-personality, de-personization, etc.) can not be well explained by means of any model of individual self. The “axiom” of individualistic self is, like the axiom of Euclidean geometry, adaptable only in the daily life and not in unusual situation. More inclusive “Non-Euclidean” theory of self should be proposed. It is shown in Fig 2 B, the detailed shematization of which is developed in this article.

### 1. はじめに

本資料は、存在感に関係する「自己」の非日常的体験を説明する理論の提示である。筆者はここ数年間、本誌上に「自己」の非日常的形態に関する体験例や、体験学習例を報告してきた。すなわち一般人にみられる共同自己の感覚（4号）、イメージ面接にあらわれた多重自己（5号）、共同自己形成や無我に関する体験学習（6号）である。この他にも別に報告した自己超越の体験学習例や、人類共同存在意識の構成実験（『自己探求の心理学』社会思想社）などがあり、これらはすべて日常的個人的自己の感覚を超えたものを示している。そこで個人的自己を原点とした従来の哲学的・心理学的自己理論に代わって、上記非日常的自己をも、包括説明しうる理論が必要になるわけである。

本資料に掲げる理論は、筆者が「人間性心理学研究 3号」にオリジナルな論文として提出したものとほぼ内容を同じくしている。ただ本学「人間科学研究」として今まで数回にわたって非日常的自己に関する報告を掲載してきたので、それをまとめる意味で、若干の補正を加えた上で本誌上に再掲載することを適当と考えた。

なおこうした理論を必然的ならしめている経験的事実としては、もちろん上述した筆者の実験的体験学習や調査例以外に、文献的にもまた臨床的にも得られている数々の非日常的自己の体験例が数多くある。これに関して一部は過去の論で詳しく述べたが、参考までに我々が観察し得た体験例を略述すると次のようなものがあげられる。（拙著『人間学』有斐閣双書、『自己探求の心理学』社会思想社）

- (1)心理療法・Tグループ等における成長体験においては、「今ここで」のこだわりのない生が強調される。個人的自己の境界にもこだわらず、他者・自然・外界に開かれることになりやすい。
- (2)禅その他における無心ないし「悟り」に近い体験においては、個人的自己は絶対的意味を失い、人は自然ないし普通と共に生きる。「真の自己」は通常の知覚的シエマを超えて体験される。
- (3)「宇宙的自己」ないし「大なる自己」とでもいうべき体験が同じく多くの東洋的訓練において報告され、また西洋の宗教体験においても報告されている。
- (4)上記と類似の体験は宗教的と否とを問わず、日常生活の中でもかなり多くの人に（程度の差こそあれ）体験されている。
- (5)前述した自己に関する病的体験、すなわち離人症、二重人格、共生的自己等は、もちろん臨床的に数多く報告されている。
- (6)上記の病的な自己の形態と同種の形態が一般人の日常生活の中で漠然と、あるいは明確に体験される場合も稀ではない。これらの体験は病的状態との境界領域ないし移行過程の様々な段階において観察される。また超越的体験との間にも様々な移行段階がある。
- (7)自然との一体化・融合の体験、あるいはそれに近い没我的体験はさらに広くみられる。
- (8)集団的自己の感覚とくに家族的自己は、日本では顕著であるが、おそらく多くの国で過去においてはかなり一般的だったと思われる。ただしこれらの集団自己は多くの場合閉鎖的であって、外部者に対して排他的になる傾向がある。しかし一方においては、個人的自己も集団的自己也共に外界に向かって開かれていくような成熟した形態が見られる。
- (9)カウンセラーの共感の極における一体感や相手だけが存在しているという体験、その他他者愛、人類愛などの開かれた共同存在の体験が上記に関連して認められる。この場合は前述した成長体験や宗教体験に見られる普遍的自己と似た形になってくる場合が多いよう

である。

(10)このほか臨死者の体験、その他の特殊状況下での体験など、個人的自己を相対化させるような体験は数多く報告されている。

なお以上の諸体験の生起する条件については、まだ十分にわかっていないところが多いが、一般に我執の少ない、なんらかの受動的注意集中の状態において起りやすいこと、あるいは日常的な自我の体制を維持できなくなったときにおこりやすいことはたしかなようである。

## 2. 理論的観点

以上のような非日常的自己の体験は、構造化の程度こそ違いますが、非個人的自己が様々な形で可能だということを示している。おそらく、こうした体験時には、通常の知覚的シエマや、準拠枠、行動のパタン等々が緩められたり、こえられるのであろう。病的ケース、とくに精神病においては、通常のシエマが失われ、妄想や幻覚等々とともに異常な自己像が生じると考えられている。一方成長体験においては、通常のシエマが超克され、生き生きとした、あるいは神秘的な体験とともに非日常的な自己像が生じるのだと考えられる。その成長体験の極においては、時として個と普遍、主観と客観等々の二律背反もこえられると考えられる。

ゲシュタルト心理学や認知心理学的アプローチからしても、自己とは認知体系であり、それは人格や文化によって構造化のされ方が違ふとみることが至当である。つまり、自己は様々な構造化される。現代個人主義社会において大部分の人が抱えている個人的自己は多様な構造化の形態の一つにすぎないと考えられる。

われわれは個人的自己の知覚ないしイメージを強く基礎にもっており、従って個人的自己のみが絶対かつ正常な唯一の形態だという公準が通用している。しかしながら、あきらかにこうした公準は個人的自己のイメージと同様、日常的な場面、つまり有機体的個体と

して統合され、他者や外界に適応しているという場面においてのみ通用するにすぎない。適応がうまく機能している限り、個人単位のイメージはよく機能している。しかしながら不適応状態においてはもちろん、コミュニケーションや死、その他極端な非日常的な事態においては、前述した非個人的自己の形態の方がより適切になるものと思われる。したがって新しい理論はあらゆる日常的・非日常的事態における自己構造化の原理を示すものでなければならず、その1つの場合として、日常的個人的自己をも説明できるものでなければならない。これが重要な第1点である。

第2点として新しい理論は次のことを説明しうるものでなければならない。すなわち、非日常的自己の多くの体験において、「大いなる自己」「普遍的作用」「宇宙的な力」等々と呼びうるような何ものかが感じとられているという事実である。その他の非日常的な経験に比して、このような体験（以下フロムに従って $\alpha$ 体験と呼ぶ）は形態や言語をこえた極として位置づけられる。少なくとも体験者自身は、そのように認知しているものが大部分である。これに対して、自然との一体感、自他の一体感、人類共同存在の感覚等々は $\alpha$ 体験の有形化ないし象徴化（投影）だと考えられる。

(注) 一般に他者・集団・人類等に「自己」を感じる（見出す）ような体験を有形化の延長線上に考えてよいかどうかはきわめて困難な問題である。それらを「自己」と感じるにしても閉鎖的な愛や集団性と、開放的な共同存在性の場合では、体験全体の特徴が違う。閉鎖的な共生関係においては通常の個人的自己と外界との境界が、集団と外集団との境界におき替えられるというニュアンスが強く、 $\alpha$ 体験的ニュアンスはほとんど伴わないのが普通である。これに対して開かれた愛や、人類我のような感覚においては、宇宙的自己とかなり近いニュアンスで、 $\alpha$ 体験的要素を（かなり漠然とした形ではあるが）見出せる場合が多いようである。かくして根底的存在として $\alpha$ を仮定し、個人主義的シエマから

解放されたときにそれが様々な程度において体験化され実現化されると考えることは決して不当ではない。

なお以上2点の相互関係、すなわち自己の形態と $\alpha$ 体験の関係についてはかなり複雑な仮説を必要とする。

経験的事実からするならば、ある種の非個人的自己の形態は、 $\alpha$ 体験と多少とも関連している。逆にいえば、 $\alpha$ 体験時においては、個人主義的な固い認知シエマはなくなるかゆるめられ非個人的な自己のあらゆる形態が知覚され易くなる。しかし、とどされた集団自己や共生的自己その他の固い非個人的自己は $\alpha$ 体験とはいささかのかかわりもない。そしてこの意味では自己の形態と $\alpha$ 体験とは相互に基本的に独立である。また、いかなる自己の形態も病理と成長体験の双方の相をもつということも事実である。（もちろん、ここでいわゆる自我の強さなど病的体験と成長体験の間の様々な差違が問題になるが、ここでは省略する。）

以上のような吟味を経てわれわれは新しい理論を構成することができる。それは自己構造のあらゆる形態が認知的に可能であり、非個人的な形態をも許容するという前提にたつと同時に、普遍的 $\alpha$ 体験の事実をふまえたものである。

ここで自己の形態の構造化は科学的にアプローチしうる問題である。これに対して、おそらく $\alpha$ 体験における「普遍的自己」そのものは、イメージ的にも概念的にもアプローチしきれないものであろう。体験者はそのイメージ化や概念化に苦勞するのが常である。それは知覚やイメージや科学的思考を生み出すようなシエマをこえていると考えられる。

この故に少なくとも現代の西欧理論家はこうした体験自体を説明することを慎み、自らを現象学的記述の範囲内にとどめていた。しかし科学的なパラダイムとしては、われわれを無意識に支配している個人主義的な公理を超克するためにも、われわれはさらに一步をすすむべきであろう。

現代現象学的理論との関係についてさらにいうならば、おそらく以上の要件を満たす新しい自己理論としては、「自己」を固定的に対象化せず、関係性においてとらえ、そこにおいて個と普通の止揚をはかる方向に向うのが1つの有力な道であろう。それは簡単な記述ですませられるようなものでなく、まさに現象学的人間学におけるような論理展開ないし具体的直観的理解にたち戻ることを要求するものかもしれない。そのようなアプローチは意義の深いものであるが、反面わかりにくいものとなり、多くの科学者が無意識に前提にしている個人的自己の常識が、暗々裏に復活してきてしまうのが現状である。したがって本来アプローチしきれないかもしれない領域や、難解な論理や直観を必要とする領域の存在を認めつつ、できるだけ車線化したシエマによってその領域に極力近づく努力が必要である。

このためここでは、公理系を設定し、それによって自己の形態の多様性や「普遍的自己」へのアプローチができる有効な理論を導こうとするわけである。その理論は公理系としてできるだけ単純に設定され、しかも自己に関する非日常的な体験を扱ってきたユング、マズロー、レインらの理論や東洋思想等々を包括しうるものでなければならない。

ここで前述したように、ユークリッド幾可学に対する非ユークリッド幾可学の場合と同様われわれは通常の個人主義的な自己の概念に対して新しい自己の公理系を設定することになる。これを自己の「非ユークリッド的公理」と呼び、それによって自己の形態に関する体験や、「普遍的自己」に関する体験を系

統的にとらえることをめざしたい。

### 3. 自己の「非ユークリッド的」公理系

非ユークリッド的自己の公理に関してはいくつもの選択可能性がある。公理や理論それ自体がイメージや直観を前提としないことはもちろんであるが、それらが実際の体験にできるだけ近いものである必要があり、この点でイメージモデルを用いることはやはり有効である。ここで様々な異ったモデルが考えられるが、その吟味経過は省略し、結論的に筆者が採用した図1のモデルのみを紹介する。ここでは図1Aのユークリッド的モデルはほぼそのままにしておいて、(つまり対象としての個人的自己の定義には何ら変更を加えることはなしに)ただ $\alpha$ を加えることによって、図1Bの非ユークリッド的モデルを設定することができるのであるが、そのことはのちにゆずるとして、重要なことは、作用としての自己(図1の→)および、対象としての自己(図1の○)を分けて考えることである。(この両者はフッサールの現象学におけるノエシス、ノエマの概念に近いが、通常の個人主義的自己理論における主我と客我の概念とは違うことに要注意。)

ここで、対象自己は認知心理学的な意味で多様に構造化されうるものと規定される。これに対して作用としての自己の規定のし方は、まさにユークリッド的公理と非ユークリッド的公理がわかれるポイントである。それは図1A、図1Bのモデルの違いに対応する。

以上のようなモデルを前提にして、われわれは次の表のように公理系を設定することができる。

表 自己に関する公理系

- (1) 自己とは、作用ないし志向性(ノエシス)と対象性(ノエマ)の両側面をもつ統合された全体であり、個人において自覚されているものである。
- (2) 対象自己は、生活史を通じて構造化される。構造は、恒常的であり、伝達可能であり、科学的モデルによって研究することができる(現在の心理学的自己理論の大部分は対象自己に関するものである)。
- (3) 一方、作用的自己そのものは科学の対象になりえない。科学の対象としたときには既に対象自己に転化しているからである。したがって作用的自己をめぐってわれわれは次のいずれの公理をも設定することが可能である。

〔ユークリッド的公理〕

3-A 作用的自己は、個人的な存在である。それは個人にとって単一のユニークなものであり、他の個人の作用的自己とは全く別の物である。

3-B 作用自己は、個人の身体に属し、身体と不可分のものである。それは生後徐々に発達し身体の死後消滅する。

3-C 作用的自己は、対象自己の作用（志向性）と同じことである。作用的自己は対象自己と不可分であり、本質的に単一である。その他の非個人的自己の形態は非本質的病的知覚の産物である

〔非ユークリッド的公理〕

3-A' 作用的自己は、普遍的で永遠の存在ないし力である。それは他の個人の作用的自己と同一のものないし共有されたものである。

3-B' 作用的自己は、個人の身体をこえたものであり、その発達や死をもこえた本質をもつものである。

3-C' 作用的自己は、個人を通じて働く（ないし実現される）、それは対象自己の作用の基礎に存在するものである。（この対象自己の作用はユークリッド的作用自己と同じにとらえられる。）作用的自己は対象自己と同じように知覚される傾向にある。この対象自己は本質的にいかなる形態としても構造化されうる。

(表注) ここで「作用的自己」と別に、「対象的自己の作用」という概念を用いていることなどの未解決な問題点が含まれている。大まかにいえば、対象的自己の作用とは、通常の心理学で扱われる衝動・動機・感情・思考など、生理学的基礎をもったものとして対象化して扱いうるものであり、これに対して作用的自己とはそれらすべてを成立たせている対象化しえない作用そのものとしてとらえられる。なお表の命題の「本質的」という概念に関連して一言すれば、「ユークリッド的」、「非ユークリッド的」いずれの視点をとろうとも公理上によって対象自己の形態は知覚的に多様でありうる。しかしながら作用的自己との関係を考慮したとき、ユークリッド的には個人的形態のみが「本質的」なものだとみなされる。作用的自己が本質的で単一だからである。これに対して非ユークリッド的には、普遍的作用的自己は本質的にいかなる対象自己の形態を通して働きうるとみられる。この本質性とは感じ方の問題でなく、経験的実証をこえた問題であるが、しかし人はこの公理上の「本質性」に基づいて自己に関する経験を「本質的」と感じる傾向がある。したがって非ユークリッド的にのみ自己は単一でもあれば複数でもありうる。また集団、普遍、無であってもよい。（無とは対象なき対象という逆説も含み、形態化を超えたものであるが、公理上は3-C'に含まれる。）ことばをかえていえば、作用的自己そのものは対象自己のいかにかわからず、本質的に普遍的なものであるが、しかし経験的には作用自己と対象自己は不可分に感じられるものである。したがって対象自己が集団自己ないし普遍的自己（ないし無）となったときに、人は作用的自己としても集団的ないし普遍的なものを感じるわけである。

#### 4. 「非ユークリッド的」自己理論のいくつかの側面

以上の公理系から私たちは「非ユークリッド的」理論を（通常の「ユークリッド的」理論に対して）構成していくことができる。理論体系そのものは諸パーソナリティ理論と同様複雑巨大なものになるので、ここではいくつかのポイントを示すにとどめる。

たとえばユークリッド的には図1Aにみる

ように、個人Bが他の個人AをB独自の方法（作用）で理解することが共感的理解だということになる。そしてそれはAの自己理解に近づきうるとしても、本質的には全く異なるものである。しかしながら非ユークリッド的には共感において図1Bのxのような「普通的自己」がBを通して他の個体Aに働くということになり、このことは普遍的作用がAを通してA自身に働くというAの自己理解と本質的に異なるものではないということになる。

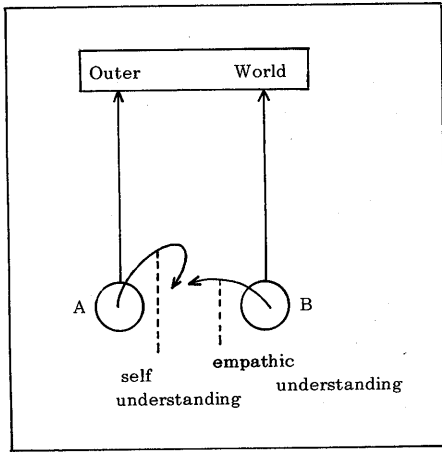


図 1 A (Euclidean)

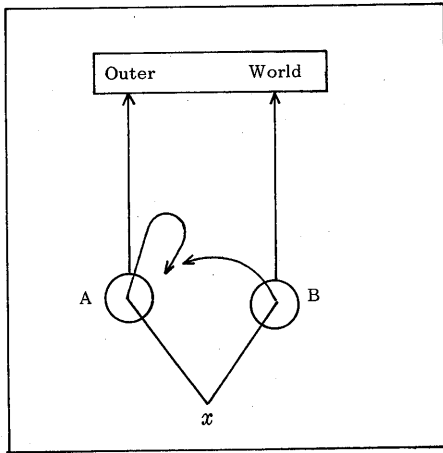


図 1 A (Non-Euclidean)

別の(記憶に関する)例をとれば、非ユークリッド的には人類共有の「共同記憶」が大事になる。それは図書館などにある文化的共有財産などをも含む。こうした共同記憶によって特徴づけられた集団自己のようなものも私たちは想定できる。個人の自己さえ、個人的記憶よりもこうした共同記憶によって構造化される場合があり、その場合存在性もまた彼自身の力や知識をこえたものとして感じられる。

前述したように、 $x$  体験の意味を「普遍的自己」の体験との関係において明らかにする

ことは本論の重要なポイントである。非ユークリッド的には個人の意識や自覚と密接に関連する「対象的自己」の作用は普遍的作用としての「対象的自己」に支えられているわけであるから、その普遍的作用が自覚されることは当然考えられる。

さらに  $x$  体験が生じる過程についていえば  $x$  体験が能動的自己実現として生じうるといふことは、多くの西欧理論が強調するところである。しかし、同時に宗教的服従、東洋的な自然の流れに身をまかすような受動性、自己催眠を含む受動的注意集中や瞑想などにおける受動性が  $x$  体験に必要だということも見逃せない。このこともわれわれの公理によって説明できるのであって対象自己の作用は能動的でなければならないが、しかしそれと作用的自己そのものとは区別されるべきであって、その作用自己の発露のためには、個人は受動的でなければならないということになるわけである。(少なくとも「我執を去る」といわれているような前提が不可欠だということはずけるであろう。)

存在感に関する理論設定も重要な課題であろう。おそらく公理 3-C を変換して、次のようにいうことができる。すなわち、作用的自己と対象自己が統合されているとき、人は「存在感」を持つのだ。そのとき人は主体的作用的存在でありながら同時にその自己を対象として客観視することができる。ユークリッド的にいえば、まさに作用的自己すなわち自己の作用と、対象的自己すなわち自己の対象性とは不可分であり、それが分離したときには存在感は失なわれる。これは次に述べる病的体験の理解につながるものであるが、一方個人的自己にこだわらなければ、個以外を原点に作用と対象が統合される。その意味では  $x$  体験ないし普遍的自己が感じられるほど存在感は増すということになる。つまり本質的に普遍的な作用的自己と大きな広がりをもった対象自己との統合が可能になるからである。実際問題として  $x$  体験において「普遍的自己」の存在感と同時に個人的自己やその

他の非個人的自己の存在感も増したという体験は多くみられている。

(注) 以上は「人間性心理学研究」に掲げたことの骨子であるが、しかし共同存在体験の事実に関しては若干の補足が必要になる。図1 Bのモデルのみによっては、対象自己の形態は全く相対的なものであり、共同自己は個人的自己と同じレベルの権利を持つだけか、あるいは個人的自己の相対性を認識させるものにすぎない。せいぜいそれが、「普通」に近づくことによって、普遍的作用 $\alpha$ の自覚につながり易いという自覚にとどまる。ところがユングが家族集合無意識から民族、人類を経て普遍的自己にまで連続的の広がり考えたように、明らかに家族共同自己や人類共同自己の実感を(この場合社会的封建的共同存在とは別の意味で)はっきり体験している人がある。この場合その広がり極致に $\alpha$ を感じると例が多いのだが(そこで、 $\alpha$ をやはり質的に異った超越的根源だとみなしても)図2のような補足が必要になってくる。すなわち図1 Bの基本を崩すわけではないが、中間的共同自己を仮定することである。図1 Bはこのような中間的共同自己が極端に少ない場合であって、本来は図のB、B'の間のような家族、友人、その他様々の「集団の心」が形成される( $\bar{B}$ )。この共同自己 $\bar{B}$ を、本論におけるように対象自己の一形態だとみなすか、個人的自己以上の「集積の対象自己」の作用だとみなすかは今後の課題である。いずれにしてもそれが究極的には $\alpha$ なる普遍的作用を根定にもつという意味で本論全体の主旨がくずれるものではない。(BとB'との関係は基本的にBとAとの関係すなわち中間的共同自己をもたない場合と差異はない。)

最後に病者の体験に関してであるが、ひとつは先に述べた、作用的自己と対象的自己の非統合が病者における存在感の異常の特徴をなすと考えることができる。そしてそれはいわゆる自我の非統合によるわけであるが、しかし病者の中には次のようなケースもあると思われる。たとえば「自分が石になってしまう」という離人症の患者でさえ、石として作

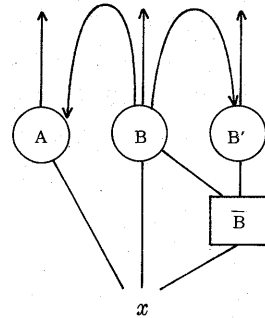


図 2

用することを受け入れさえすれば存在感は回復できる。普遍的作用に裏づけられて、作用と対象が石において統合されるからである。この場合、自己喪失は彼が個人的自己にこだわっている限りにおいてなのだということができる。このことは共生関係や二重人格その他のあらゆるケースについてもいえる。これは自己の形態が偏倚しているながらに自我が比較的強い場合と解されるが、一方自我が弱いために他の主体(ないし $\alpha$ そのもの)にさらされ、それが個人的自己の喪失、非個人的自己の感覚を生むのだという面も無視できない。このいみでは自我を鍛えつつ、個人的自己にもなれるような治療こそが望まれる。それなしに普遍的なものにさらされていることは、(感情的深層にさらされている状態と同じく)まさに病理的だといわなければならない。

以上のようにして私たちは「非ユークリッド的公理」に基づいた理論体系を構成していくことができ、それによって従来は非論理的、直観的にのみ把握されていた非日常的体験を論理的にある程度記述していくことができるわけである。

ただし先にも述べたように、体験的直観および直観された世界は、言語化も困難であり、まして安易な概念化、論理化はできない。そのことを承知の上で、われわれが暗々裡に前提としている個人的自己中心の存在感にもとづくスキーマ(人間論)を相対化すべく、あえ

て非個人的シェマをできるだけ図式的に単純化して「非ユークリッド的」公理系としたわけである。

第4号掲載の自己像尺度に関しては、必ずしもこの理論を前提としてはいないが、しかし

その背景あってこそ広い問題意識が設定されている。そしてその後に掲載した非日常的自己の諸研究こそは、まさにこうした理論的背景を暗々裡の前提としたものであることをここにお断わりしておきたい。